

## その他

### 時間の遅れがきめた生と死

長崎県 元島 和男

昭和十九年一月十日、私は満州の新京に駐屯しておりました満州第二六八七部隊（高射砲隊）の通信兵として入隊しました。この部隊は九州の下関重砲兵隊、佐世保重砲兵隊、厳原要塞重砲兵隊員によって編成されておりましたので、とても気合の入った部隊でした。

真っ白い銀世界の雪の中で、零下十度くらいのおきでも、雪にまみれて訓練が続けられ、毎晩毎晩、目から火が出るように叩かれ鍛えられました。軍隊の厳しさは話には聞いておりましたが、予想外でした。現役

兵の私たちはまだ若いし、少々叩かれても蹴られても辛抱できましたが、気の毒なのは召集兵の人たちでした。

三十五歳くらいの人たちが軍人勅諭を暗誦してないからと、若い二十二歳くらいの一等兵、上等兵から皮のスリッパで殴り倒され、涙を流しておられる姿を見るにつけかわいそうでなりませんでした。次は連帯責任だ、横一列に並べと、並ばされ、「足を横に開け」と開かされ、「貴様たちはみんなたるんでおるぞ」と、皮のスリッパで両頬を殴られるし、向かい合い同士で殴り合いをさせる。まさに格子なき牢獄でした。

消灯ラッパが鳴り、五尺の寝台兼布団にもぐり込むと、だれだかわかりませんが、すすり泣きが聞こえてくることも度々ありました。

昭和十九年三月二十七日、突然移動命令が下りました。どこに移動するのかは全然わからないまま、慌ただしく貨物列車に乗せられました。翌二十九日、目を覚ましますと、大きな工場が見える駅に停車しておりました。どこの駅で、今後どうなるかはだれにもわからず、不安な顔をして「ここはどこだ」とささやき合っておりすると、「ここは鞍山だ、我が部隊はこの地の昭和製鋼所の防備に当たる。一同下車して駐屯地の陣地向かう、準備せよ」と伝令が走り回っております。後でわかったことですが、私もサイパンに行くため南下して来ましたが、大連港出港に間に合わないため、この地の防備に当たっていた第二六八六部隊が急遽サイパン行きに変更され、私どもの部隊が後任の防備に当たることになったということがわかりました。

鞍山の昭和製鋼所は南満州一の製鋼所であり、軍需産業の拠点であったため、日本軍と満州国軍の防空隊によって守備されていました。私たちは連日、高射砲隊としての訓練が続けられました。

一期の検閲が終わりますと、私は第一大隊本部付き

通信兵となりました。間もなく大隊副官の伊藤中尉が病気になるため、私は看護のため伊藤副官と共に鞍山製鋼所病院に入院することになりました。

戦局はいよいよ熾烈となり、重慶を発したB29爆撃機は北九州方面まで飛来し、爆弾投下を行い甚大な被害を与えるようになっていました。

昭和十九年七月二十九日（日曜日）、この日は関東軍司令長官に山田乙三大将が就任することとなり、その就任式に、空軍をはじめ関東軍の偉い人たちが新京に集合されました。正午過ぎ、突然空襲警報のサイレンが、けたたましく鳴り渡りました。びっくりした私は急ぎ病院の屋上に駆け上がりました。なんと米軍のB29爆撃機が波状をなして飛来し、製鋼所の建物に爆弾を投下し、次々と工場の建物が飛散し燃えているではありませんか。

私は急ぎ伊藤副官の病室に駆け込み「副官殿、空襲です。ここでは危ない地下室に避難してください」と叫びながら、銃剣と軍服を急ぎ身に着け、伊藤副官を地下室まで抱きかかえるようにして避難させ、「副官

殿、自分は部隊に帰ります」と言いますと、弱々しい声で「外は危ないぞ、用心して行くよう」と声を掛けてくださったのに「大丈夫です、また帰って来ます」と叫んで病院の外に飛び出しました。

街中は大混乱です。初めての空襲の経験であったため右往左往、「逃げろ、危ないぞ」と口々に叫びながら山の中に走る人々。真っ白い銀色の翼から落とす爆弾の空気を震わせる音は、ちょうど自分の頭の上に落ちてくるようなすさまじさです。B 29目掛けて発射する高射砲の弾は届かず、途中で破裂し、粉々になった破片がピュンピュンと飛んで来るし、民家まで吹き飛ばす様は、まるで映画を見ているようなすさまじさでした。

走る走る、部隊目掛けて汗びっしょりになり走りまわりました。高射砲の破片をくぐるように三キロの道を走りました。途中で満州軍の兵隊が恐がって木の陰にかくれているのを「この馬鹿野郎カイカイデ（早く早く）」と叱りながら走りました。距離の長いこと。「こん畜生、B 29の馬鹿野郎」と空に悠々と飛んでいる姿を見

上げては走りました。やがて日本の戦闘機が次々とB 29に襲いかかりますが、次々と落とされる。高射砲は届かない（七センチ高射砲のため七千メートルくらいしか上がらない）。

B 29は大きいため上空では低く見えますが、約一万メートルの上空を銀翼を並べ、悠々と爆弾を落としては南下していきます。十回くらい波状飛来してきました。そのときは、九十八機が飛来してきておりました。

部隊の営門に着くや「第一大隊通信班満尾一等兵（旧姓）通ります」と大声で叫び、自分の部署にやっとならぬうちに約二十分、走りに走りました。グワーと爆弾の音、ピュンピュンと高射砲の破片、爆弾で飛び散る家、真っ黒い煙を上げながらメラメラ燃える工場、こん畜生と流れるくやし涙、暑さのため軍服も汗びっしょり、顔は砂ぼこりで泥だらけでした。B 29は一機の損失も受けず悠々と我が物顔に飛び、落とせる爆弾はみな落とす、南の空へ去ってゆきました。

その間約三十分、鞍山の街はまさに大騒動、日本軍と空軍の憐れさを曝け出してしまいました。関東軍司

令官の就任式と日曜日を狙っての第一次鞍山空襲は、敵にとりましては大成功であり、スパイ活動の恐ろしさをしみじみと感じました。

小隊長よりは、軍人の本分を忘れず、三キロの道をよく走って来てくれたと、お誉めの言葉を頂戴しましたが、メラメラと燃えるベンゼン工場を見つめながら、口惜し涙を止めることができませんでした。病院の伊藤副官のことが気になり、小隊長にお詫びし病院に帰りましたが、散々にやられた街中での満州人の目は冷たく感じられました。

翌三十日、B 29一機が空襲の結果を偵察のため飛来しましたが、一万メートル以上の高空ではいかんともし難く、戦闘機は戦闘を交えることなく飛び去りました。満州は空気が乾燥しているので空は青く高く、飛んでいても低く大きく見えるので、なぜ高射砲の弾丸は届かないのかと不審がらせました。

以来、重慶方面のスパイ活動が強化されたようで、私ども通信兵に入る情報は、「ただ今B 29約百機、成都空港離陸、重慶上空通過、徐州上空通過、北九州方

面へ向かうものごとし、南満州は注意せよ」と情報が入るようになりました。

九月四日早朝、「B 29約八十機、重慶上空通過、十時ごろ徐州上空通過、南満に向かうものごとし」との情報が入りました。十二時ころには鞍山に来るぞと緊張が高まりました。

当時、徐州上空で北九州に行くか、南満州に行くかが判別されておりました。やがて大連上空通過の報により、空襲警報が発せられ、空軍基地も高射砲陣地も緊張し、手ぐすね引いて待ち受けました。南方を監視していた宮崎県出身の新増兵長が、「一万メートル南方に敵機発見」と肉眼で捉え報告すると同時に、高射砲が一斉に火を噴きました。それと同時に、編隊が乱れました。機先を制せられたB 29は編隊を乱したまま襲いかかってきました。

爆弾の雨、防空壕内の通信機室に今にも爆弾が降ってくるような物凄い爆音、発射する高射砲の音、友軍戦闘機がB 29に襲いかかりますが、翼の四台の機関銃、真ん中と後方の機関砲に阻まれてなかなか近付けない。

やがて機関銃弾を被弾して一機二機と煙を吐いて戦闘機は落ちていきます。「やれやれ、落とせ落とせ」と届かないとは知りながら思わず声援が飛び出す。

中隊長の「高度八千発射」と声いっぱい張り上げての号令です。しかし街の方は前回と同様、工場も民家も飛び散り正にこの世の地獄です。その中でB29一機が煙を上げて落ち始めました。「やった」と歓声が上がります。B29は編隊を乱し南の空へ退散し始めました。

この一機を撃墜したのは、日本軍の高射砲でなく、満軍の高射砲（戦艦「陸奥」の高角砲を払い下げたものと聞いております）によって撃墜され、遼陽方面へ落ちて行きました。早速私たちは墜落場所の確認と、乗務員の捕獲を命ぜられ、軍用トラックで追走しましたが、発見することはできませんでした。幸いと言いましようか、その折、日露戦争のとき、陸の軍神と称されました橋周太中佐の戦死された場所を発見し、安らかな御冥福をお祈りすることができました。同じく長崎県の島原半島出身の橋中佐の大奮戦の模様を思い起こし、思わず手を合わせ涙がはらはらと流れ落ちま

した。

九月九日、三回目の鞍山空襲がなされ、三度昭和製鋼所を中心に爆弾の雨が降ってきました。高射砲での防戦、戦闘機による防戦、B29の編隊の中に突っ込んでいく戦闘機の勇姿、さすがのB29の編隊も短時間の空爆で退散しました。

九月二十六日早朝、「徐州上空通過、南滿へ向かう」との情報が入り、空襲警報が発令されました。一般市民は防空壕や山中へ避難しました。憎らしいB29発見、高射砲が一斉に火を噴きました。戦闘機がB29目掛けて襲いかかりました。巨大なB29、トンボのような小さな戦闘機、空中戦は手に汗を握るほどすさまじいものでした。

B29の機銃で落ちて行く日本軍の戦闘機に、残念の涙を流しながら、科学兵器の相違を空恐ろしく感じ、体がふるえました。何くそ何くそと気は焦っていても、巨大なB29爆撃機の前にはどうすることもできません。空気を振るわせて落ちる爆弾の音に、思わず首を引っ込めては、落ちた方向に伸び上がって見ますと、被爆

した建物が噴き上がって燃えていました。何と憐れなことか。そのなかでも大隊長以下みんな命がけて高射砲を発射していました。その雄々しい姿はまさに鬼神で、今でも臉の裏に残っております。爆弾を落とすだけ落とし、悠々と南の空へ去って行くB 29。

翌二十七日、敵のダグラス偵察機一機が前日の戦果を見極めるためであろうか高空を飛来し、南へ飛び去って行きました。百機近くの編隊で波状的に襲いかかるB 29、燃え盛る被爆建物、逃げ惑う一般民衆、このような惨状が内地でも繰り返されているであろうと思うと、例えこの身はいかになろうとも負けてたまるかと、若き血潮が燃え上がってくる毎日でした。

昭和製鋼所全滅と判断したのでしょう、この後、空襲は受けませんでした。ノモンハン事件では、ソ連戦車を百発百命中中させ、感状を受賞した我が高射砲隊も、一万メートルの上空のB 29には弾は届かず、途中で破裂するのが残念で残念でなりませんでした。

昭和二十年八月六日早朝、広島に原子爆弾が投下された日の情報は「本日早朝、広島市にアメリカの新型

爆弾が投下された。我が方の損害は軽微である。目下被害状況調査中である」との情報でありました。

八月九日、ソ連軍の宣戦布告の情報ばかりで、長崎市への爆弾投下はほとんど伝わってはいませんでした。当日は加藤部隊の当番兵として官舎におりましたが、ソ連軍侵攻の電話が入るやいなや、加藤部隊長は飛び上がって「これで日本は負けた。さあ陣地へ」と自動車車を飛ばしました。その日の午後には奉天への移駐命令が下り、移駐準備で大騒ぎになりました。

翌日昼前に奉天省の北陵に到着、奉天の飛行場の防備をすることになりました。奉天でサイパン玉砕を知り、第二六八六部隊が全滅したことを知りました。数時間の違いで私たちに代わりサイパンへ出発した第二六八六部隊の人たち。鞍山で空襲を受けたとは言え、生き延びた自分たちは、まことに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。生と死の境は正にわずかの時間、としみじみと感じました。

長崎に新型爆弾が、広島に次いで投下され、死傷者多数との情報も奉天で知りました。

八月十三日夕刻、突然「日本は無条件降伏を受入れ停戦が予想される。関東軍は断固として最後まで抗戦することを命令する」との意味の情報が飛び込みました。急ぎ上官に報告しましたが、デマにしろこまで追い詰められているのかと、うすうす知ることができました。

十四日には、さらに「いかなる情報が入ろうと、関東軍の態度は不変である。動揺することなく戦闘を続けよ」との意味の情報が入る。

十五日の朝、今度は「本日正午、重大ニュースが全国民に放送されるので、注意して聴くように」との情報が入る。種々の情報が入り乱れ、私たちは何を信じればいいのか動揺しました。

十五日正午、ラジオの前に整列し、途切れがちな玉音放送を聴き、終戦だ、戦争は負けた。天皇陛下直々の放送だ、間違いはないと。居並ぶ兵士たちは涙を流し声を上げて泣きました。この姿をあざけ笑うようにダクラス双胴の米国軍機が奉天で捕らわれていたアメリカ兵を乗せ、悠々と飛んで来るのを見て、数名の兵

士が高射砲にしがみつき、隊長撃たせてくださいと泣きながら叫びました。将校は「やめる戦争は終わった」と引き止める。いざこざが起き、座り込んで「何故負けたのか、こんながんばってきたのに」と大声で泣き崩れる兵士。それはそれほあまりにも憐れな状態でした。

十八日十時ころ、司令部へ命令受領を命ぜられ、私は受領に急行しました。命令は鞍山で第一大隊長であり、かつて当番兵として仕えた古河中佐より悲壮な声で伝達されました。司令部命令「戦争は終わった、明日十九日ソ連軍が奉天に到着する。武器は一切処分すること。現地入隊した兵士については軍務を解除し、直ちに帰ることを許可する」との命令でした。古河中佐は私を名指し、「満尾兵長復讐せよ」と命じられましたので、頬を濡らす涙を拭きながら、大きな声を張り上げて復讐しました。この命令が最後でした。

銃剣類は長沼公園の池に投げ込む。満州国内で現役兵として、召集兵として入隊した者は急ぎ帰る支度をする。営内の同年兵は大騒ぎになりました。私と一緒に

に入隊した同年兵は、荷物をまとめて、泣きながら別れを告げ、奉天駅へと帰って行きました。私はあの苦しみを共にしたこの部隊と最後までと一人残りました。

九月十八日、ソ連軍より東京へ帰す、持てる服装寝具は一切持参せよ、との達しがありましたので、日本へ帰れるぞと、これまた大喜びの大騒動となり、持てるだけの荷物を背中や両手に持って、奉天駅から屋根付貨物列車に乗せられ、ウラチオストク経由で帰ることでしたが、列車は北上しました。

途中、長い年月にわたり蓄積された一切の財産を残し、裸一貫になって屋根の無い貨車に大人も子供も、男女一緒に乗せられ、雨に濡れながら南へ下る開拓団の人。一般民間人の人々が手を振り「兵隊さん元気でねえ」と声をかけてくださる姿に涙が溢れ出しました。

日本軍の中で最精鋭と言われた関東軍のなれの果ての姿に、激励してくださる皆さんに何とお詫びすればよいのか、「皆さんすみません、二気気で頑張ってください」と通過する列車に大声でお詫びし続けました。

現在、残留孤児の皆さんが親探しをなさっている姿

をテレビで見る度に、当時の引揚者の姿を想い起こし涙が出ます。黒龍江を渡った私たちの列車は、ウラチオストクとは反対に北へ北へと走りました。「しまった、だまされたぞ」と気付き、また大騒ぎとなりました。

雪の中を走ること三十四日、十一月三日、明治節の日にカザフ共和国カラガンダに到着しました。この日からつらいシベリア抑留生活が始まりました。

昭和二十二年七月十五日、カラガンダ地区よりの第一次ダモイ（帰国）が始まりました。私は、一五〇人の病人を引率し、ナホトカ経由で七月二十六日舞鶴港に上陸しました。二十五歳であった私にとっては一五〇人の病人を励ましながらの十一日間は大変な苦勞でした。

二度と戦争があってはならないと、現在の平和に感謝しています。